

付 論

梅 牟 礼 城 の 構 成

千 田 嘉 博

梅牟礼城は標高223m、比高200mの峻険な山頂にあり、周囲を一望し河川、街道を押さえる要衝に立地する。山頂の遺構は完全に遺存しており、保存状況はきわめて良好である。地表面観察の結果、最終段階の梅牟礼城は曲輪を等質的に連ねたのではなく、相互に機能分担をさせながら高度なプランを実現したと評価された。そこで構成の要点を検討する。

主郭は城域西側端に位置し、最高所を占める。上下2段の削平地からなるが、いずれも幅が狭く、居住性を備えた建物を築くことはむづかしい。城内防戦の中核「詰め丸」に相当した実戦的空間であったと思われる。ここは南北尾根筋からの攻撃に備えるためにも重要であった。現在も神社が所在するが、精神的なよりどころとして城のあった時代から、宗教的施設があった可能性も考えられる。

曲輪2は城域中央を占める、最も面積の大きい曲輪である。城主クラスの山城内の屋敷が備えられたのはこの曲輪と推定され、中心的な居住機能を発揮したと考えられる。曲輪中ほどには2つの土塁状の盛土が認められる。現在は風倒木が重なり、詳細を観察することができなかった。これを村田修三氏はくい違い虎口と評価している〔(村田「梅牟礼城」(『図説中世城郭事典』3、新人物往来社、1987)。村田氏の観察によれば、この土塁によって曲輪内は南北2つに区分されていたことになる。〕

佐伯市教育委員会の測量図では矩形の土壇と図示され、虎口とは評価できない。しかし単純な槽台としては、曲輪中央に2つの土壇が近接するという、位置の疑問が残る。土壇が後世のものでないとするれば、村田説が合理的解釈といえよう。今後、発掘調査によって土塁の機能が解明されることが期待される。

主郭と曲輪2の南斜面には10段ほどの帯曲輪がある。ここを含め一帯の斜面はかなりの急傾斜で、防御上特に不安なところではない。だから帯曲輪は防御より、スペースを確保するためにつくられたと考えられる。城兵の駐屯場所などとして機能したと推測できる。

中心曲輪群の東西と南の尾根には堀が集中的に配置されている。防御の焦点となる主尾根東部分には12本の堀切り・堅堀が連続する。登攀ルートとしては唯一と思われる各尾根筋の防御に、この城がいかに苦心したかわかる。ことに曲輪3の北斜面に連続する5本の堅堀は、堅堀と堅土塁を築き並べた畝状空堀群と判断される。

この畝状空堀群がつくられた場所はかなりの急斜面である。しかしその下に小規模な派生尾根があり、緩傾斜となることへの配慮であろう。空堀群の直上には前後を比高差の大きい堀切

りで守られた曲輪3があり、きわめて強い防御空間を実現している。

このように梅牟礼城は中心・居住機能を重視した中心郭群と、堀切り・竪堀を存分に配置し、防御機能に主体を置いた周辺郭群の、二重の構造をもっていた。しかし普請による虎口部の特定化や、横矢掛け・横堀・土塁による中心曲輪の求心力強化は実現されていない。これらは築城主体の権力のゆるやかな支配をうかがわせる。

現在、地表面から観察される最終段階の遺構の成立年代は、畝状空堀群の存在から天正年間(1573～91)と推測される。さらにこの地域の政治状況と考え合わせれば、島津氏の攻撃を佐伯惟定が防いだ天正14年(1586)年頃の可能性が最も高いと思われる。これ以前の大永7年(1527)の梅牟礼合戦段階の遺構は、単純な削平地と堀切りを主体とした城郭と推定できる。しかし地表面観察からは積極的に古拙とすべき点は指摘できず、具体的な様相の解明は発掘調査の成果を待つしかない。

梅牟礼城は規模の大きな遺構が完全に保存されている上、詳述はできなかったが小田山城など周辺の出城との関係が明瞭で貴重である。そして畝状空堀群などの特殊遺構の伝播と発達を考えるにも最適である。さらにこれら遺構の年代観と文献の示す年代が一致する。これより梅牟礼城は当該期の山城を立体的にさぐることができる、一級の基準資料ということができよう。

現在、地元の集落では年に2回、総出で登山道の整備に努めていると聞く。このような城跡と地域住民のあたたかいつながりに支えられて成立する梅牟礼城跡が、これからも適切に保存され、地域のひとびとの精神的中心として生きつづけることを願いたい。梅牟礼城を遺跡として解明するためには城下部分との一体的な研究が行われ、城下町の全体像を提示する作業が不可欠である。このための地籍図分析や航空写真判読、通称地名の採録など、残された課題は大きい。

(せんだよしひろ／国立歴史民俗博物館 考古研究部)